

博士学位論文審査要旨

2021年7月13日

論文題目： 宗教的言語の解釈における伝統と革新について
—ポール・リクールとハンス・ゲオルク・ガダマーの解釈学による考察—

学位申請者： 鍵谷 秀之

審査委員：

主査： 神学研究科 教授 石川 立

副査： 神学研究科 教授 村山 盛葦

副査： 同志社大学名誉教授 水谷 誠

要 旨：

本稿の研究目的は、宗教的な言葉を了解するとはどのような行為であり、どのようにして可能になるかという問題を解釈学的観点から明らかにすることである。そのなかでも特に、個々の受容者が宗教的テキストを新たに了解することによって伝統的解釈を革新するという弁証法的過程に考察の焦点が当てられる。

第1章では、テキストの宗教性について論じられる。論考にあたっては、リクールによる隠喩理論とティリッヒによる象徴理論とが比較される。集団によって指示対象が固定されている象徴とは違い、隠喩理論においては、隠喩であるテキストは読まれることによって初めて独自の世界を展開するものであることから、テキスト自体には宗教的である客観的な基準も定義もないことになるのである。

第2章では、宗教共同体におけるテキストを解釈する際の、その主たる特徴である多義性と曖昧さの役割と重要性について、リクールを始めとする現代解釈学の諸理論を踏まえて論じられる。言語の指示機能と受け手による解釈に重点を置くならば、宗教共同体のテキストの曖昧さは客観的事実を解明するための糸口としてではなく、むしろ、読者の創造的想像力（過去の体験を再構成して新たなイメージをつくる力）を誘起するものとして価値のあることが示される。

第3章では、テキスト解釈とは何かという根本問題が、ガダマーのプレイ（独）Spiel）の比喩を用いて論じられる。プレイは子どもの遊びや音楽の演奏などを指すが、ガダマーによれば、テキスト解釈も一種のプレイである。子どもの遊びや音楽は実際のプレイによって発生し、プレイそのものに属する「存在」、「現実」となるのである。それと同様に、テキスト解釈というプレイにおいて発生する言葉の出来事においてのみ、テキストの「存在」と「現実」はあると言える。読者個人による解釈のプレイはそれぞれが特異なものであるから、同一の解釈や理解は一つとしてありえないのである。

第4章では、テキストの解釈が、解釈者の先入見、立場という観点から論じられる。啓蒙主義以降、先入見は否定的に捉えられてきた。しかし、ガダマーによれば、解釈者の先入見がテキストの他者性と対話することによって、テキストの声が解釈者に届くのであり、先入見は決して否定されるべきものではない。ガダマーにおいて、了解とはテキストを解釈者の立場に適用することであり、それによってテキストは常に新たな意味を持つのである。

第5章では、慣用化した宗教的言語の解釈について論じられる。宗教共同体のテキストは慣用化することでその多義性を失うかに思われるが、受け手の創造的想像力によって新たな解釈に導

かれる可能性を持っているのである。

本研究は、宗教共同体におけるテキストの中でも特に隠喩や物語といった、字義通りには意味を捉えることができない言語表現の特性について、テキストの生成、慣用化、再解釈を循環的現象として捉える立場から検討している。とりわけ、宗教共同体において慣用化したテキストの再解釈の可能性を指摘した点において独創性が見られ、宗教的解釈学とも呼ぶべき分野に大いに資するものとして高く評価することができる。

よって、本研究は、博士（神学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2021年7月13日

論文題目： 宗教的言語の解釈における伝統と革新について
—ポール・リクールとハンス・ゲオルク・ガダマーの解釈学による考察—

学位申請者： 鍵谷 秀之

審査委員：

主査： 神学研究科 教授 石川 立

副査： 神学研究科 教授 村山 盛葦

副査： 同志社大学名誉教授 水谷 誠

要 旨：

鍵谷秀之氏は、2018年3月、同志社大学大学院神学研究科博士課程前期課程を修了、同年4月、後期課程に入学し、所定の要件を満たして2021年3月に学位論文を提出した。2021年7月6日午後1時10分より、神学研究科は鍵谷氏に対して約2時間の総合試験を実施し、氏から宗教的解釈学の十分な素養を背景にした的確な応答を受け、氏が学位請求論文の主題領域について深い洞察を有していることを確認した。研究に必要な語学力については、博士論文執筆のための英語、ドイツ語の文献を正確に読みこなせていることにより十分なものと認められる。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 宗教的言語の解釈における伝統と革新について
—ポール・リクールとハンス・ゲオルク・ガダマーの解釈学による考察—

氏名： 鍵谷 秀之

要旨：

宗教共同体において重要とされる詩や格言、物語など（以後、「宗教的言語」と言った場合にはこれらを指す）が、生き生きとした多義性において発生し、共同体レベルでの使用に伴って慣用化され、時に再解釈されるということは、歴史的宗教の境界を越えた普遍的な現象であるように思われる。本稿はこの現象について考察するものであり、特に聖書における物語や詩、隠喩などの創造的テキストにおける伝統と、個々の読み手が創造的想像力（過去の体験を再構成して新たなイメージをつくる力）によって伝統的解釈を革新する弁証法的過程に注目する。より具体的には、個人の創造的想像力による伝統的テキストの解釈という観点から考察した場合において、テキストの宗教性とは何か、宗教的テキストを解釈するとはどのような現象であるのかを明らかにすることを目的とする。そこで本稿が用いるのは、聖書解釈学における最重要人物の一人であるポール・リコールの解釈学と、彼が積極的に取り入れたハンス・ゲオルク・ガダマーの解釈学である。リクールとガダマーはどちらも、マルティン・ハイデガーによる存在論の影響を強く受け、読者とテキストの相互作用について論じている。そのため、本稿では多義性に富む宗教的言語の解釈について考察するために、両者の論考を分析対象とする。さらに、慣用化された宗教的言語の解釈について考察するために、慣用化された日常的隠喩を分析対象とするジョージ・レイコフとマーク・ジョンソンによる認知的隠喩理論を議論に取り入れ、考察を進めることとする。

リコールの解釈学において、読者の創造的想像力はテキスト解釈の核心に位置付けられている。彼によると、宗教的言語は詩的言語の一種であり、詩的言語とは、単に事実や情報を記述するものではなく、曖昧さや多義性に富む「可能性の言語」である。そしてそれは、徹頭徹尾、隠喩的（字義通りの第1次意味ではなく、語と語の意味論的衝突、文法的逸脱によって指し示される第2次意味によって初めて理解が可能となるもの）である。象徴や慣用化された隠喩などの、指示対象の大部分が集団によって固定化されている表現とは違い、慣用化されていない詩や物語の意味は、極めて動的である。この特徴があるからこそ、受け手が創造的想像力を働かせてテキストを読むことが可能となるのであり、解釈の出来事は生じうるのである。したがって、読み手の解釈に分析の焦点を合わせるのであれば、テキストの曖昧さは客観的事実を解明するための糸口としてではなく、むしろ、曖昧さを保持することによって、読者が創造的想像力を働かせ、革新的な読み方を可能にする点において価値があるのである。よって、宗教的言語を包括する詩的言語が「可能性の言語」であるためには、そこに曖昧さが不可欠となる。

しかし、ここで次のような問題が生ずる。すなわち、テキストの成立背景といった歴史的証拠ではなく、リクールがそうするように、読み手個人の創造的想像力による解釈に分析の焦点を合わせるのであれば、宗教的とされるテキストの宗教性を定義することは極めて困難となるということである。なぜなら、彼の考えにおいて、テキストが宗教的であるか否かは、解釈者個人の創造的想像力によって生起する世界の性質に依存するからである。この考えでは、既存の宗教との関わりが薄い文学的言語であっても、受け手による解釈の出来事によっては宗教的となりうる。このことから本稿は、受け手の解釈に分析の焦点を合わせるのであれば、宗教的言語は創出時か

ら宗教的に存在するというよりも、テキストが受け手によって読まれることで生じた世界が、結果的に宗教的に機能していると考えべきであることを指摘する。

また、ガダマーのいうようにテキスト解釈が、演奏者が楽譜を読み楽器をプレイ（ドイツ語原文では Spiel）するような一種の芸術の経験であり、伝統と解釈者の「地平の融合」であるならば、テキストの「真理」とは自然科学的「方法」によって解明できるものではない。さらに、音楽の演奏において演奏者が音楽に帰属し、楽譜に従うのと同様に、テキスト解釈のプレイにおいて、解釈者はテキストの内容に帰属し、その規範に従う。したがって、テキスト解釈においては、読者ではなく解釈のプレイそのものが主体となる。楽器の演奏や子どもの遊び、定期的に行われる祝祭の「存在」と「現実」はプレイによって発生し、プレイに属している。そのため、それぞれのプレイこそが演奏や遊び、祝祭の性質を決定するのであり、それらの出来事に同じものはあり得ない。同様に、読書のプレイにおいて発生する出来事においてのみ、テキストの「存在」と「現実」はある。読者個人による解釈のプレイとその出来事はそれぞれが特異なものであるから、自然科学における方法的了解とは異なり、人文科学において同一の了解は一つとしてあり得ないのである。むしろ、歴史の中に生きている解釈者は、決して捨て去ることのできない自己の先入見を媒体としてテキストを理解するのであり、それによって、テキストは常に新たな意味を持つのである。言ってみれば了解とは、テキストを解釈者の現在の状況に当てはめるようなものなのである。

しかしながら、隠喩的テキストの語義が共同体レベルでの慣用化によって徐々に固定化されるに伴って、読者の創造的想像力による解釈の革新や、読者とテキストにおける地平の融合といった要素が希薄となることは避けられない。リクールによる生きた隠喩理論と、レイコフとジョンソンによる認知的隠喩理論を踏まえて、慣用化によって宗教的言語の語義は徐々に固定化され、宗教共同体の伝統を表現し、保持するものへと変容すると考える研究者もある。これに対して本稿は、日常的言語とは違い、宗教的言語はどれほど慣用化されたとしても、その解釈において完全に受け手の創造的要素が失われることがないと主張する。なぜなら、宗教的言語の最終的な指示とは常に、字義通りの言葉によっては語り得ない超越的事象にあるため、その了解には必ず受け手個人による創造的想像力を伴うからである。宗教的言語は、この世の事物を指し示すものではないという最も根本的な特性によって、それがどれほど慣用化され、伝統を表現するものへと変容しようとも完全に多義性を失うことはなく、その本質において常に革新の契機をはらんでいると考えられるのである。